

307-91



\*1200501369448\*

307

91

陽明文庫圖錄

第一輯  
宸翰



始



19/11

昭和十五年十一月



陽明文庫圖錄

第一輯  
宸翰



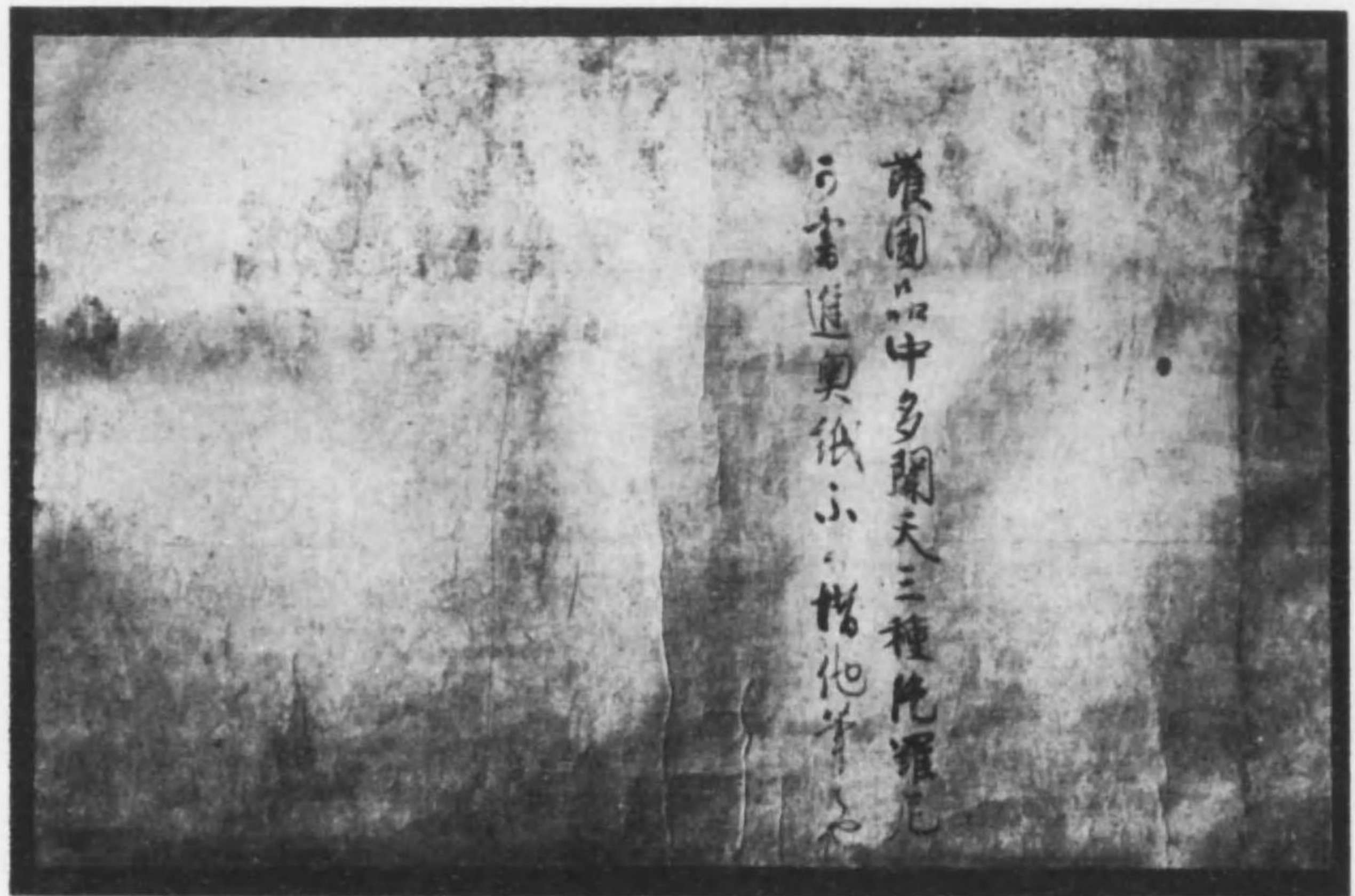
財團  
法人

陽明文庫版

目次

- 一 後朱雀天皇宸翰(國寶)
- 二 後鳥羽天皇宸翰御懷紙
- 三 伏見天皇宸翰御消息
- 四 後土御門天皇宸翰御詠草
- 五 後柏原天皇宸翰御詠草
- 六 後柏原天皇宸翰御詠草
- 七 後奈良天皇宸翰御懷紙
- 八 正親町天皇宸翰御懷紙
- 九 後陽成天皇宸翰御懷紙
- 十 後水尾天皇宸翰御懷紙
- 一一 後水尾天皇宸翰徒然草詞

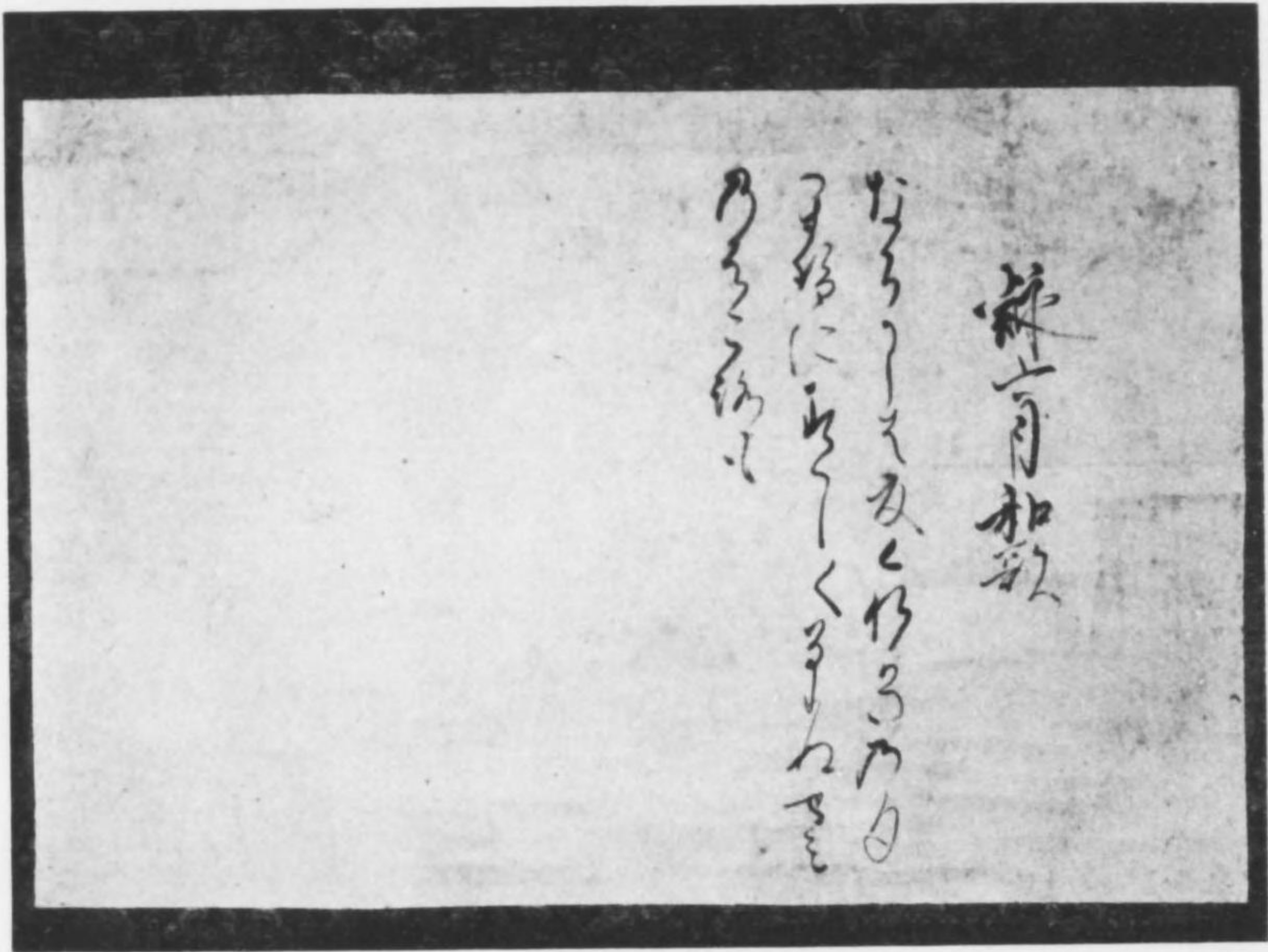
- 一二 明正天皇宸翰隨求陀羅尼
- 一三 後西天皇宸翰御懷紙
- 一四 後西天皇宸翰御懷紙
- 一五 後西天皇宸翰御消息
- 一六 靈元天皇宸翰御懷紙
- 一七 靈元天皇宸翰御消息
- 一八 中御門天皇宸翰御懷紙
- 一九 中御門天皇宸翰御懷紙
- 二〇 櫻町天皇宸翰御懷紙
- 二一 桃園天皇宸翰御懷紙
- 二二 後櫻町天皇宸翰御懷紙
- 二三 後桃園天皇宸翰御懷紙
- 二四 仁孝天皇宸翰御懷紙
- 二五 孝明天皇宸翰御懷紙



一 後朱雀天皇宸翰（國寶） 一幅

〔當今御筆 長久五年〕

護國品中多聞天三種陀羅尼  
可書進奥紙不可借他筆者也



蘇月和歌

なつかしは夏くれかたの夕  
かせにすゝしくなりぬせみ  
のはころも

二 後鳥羽天皇宸翰御懷紙 一幅

詠 六月和歌

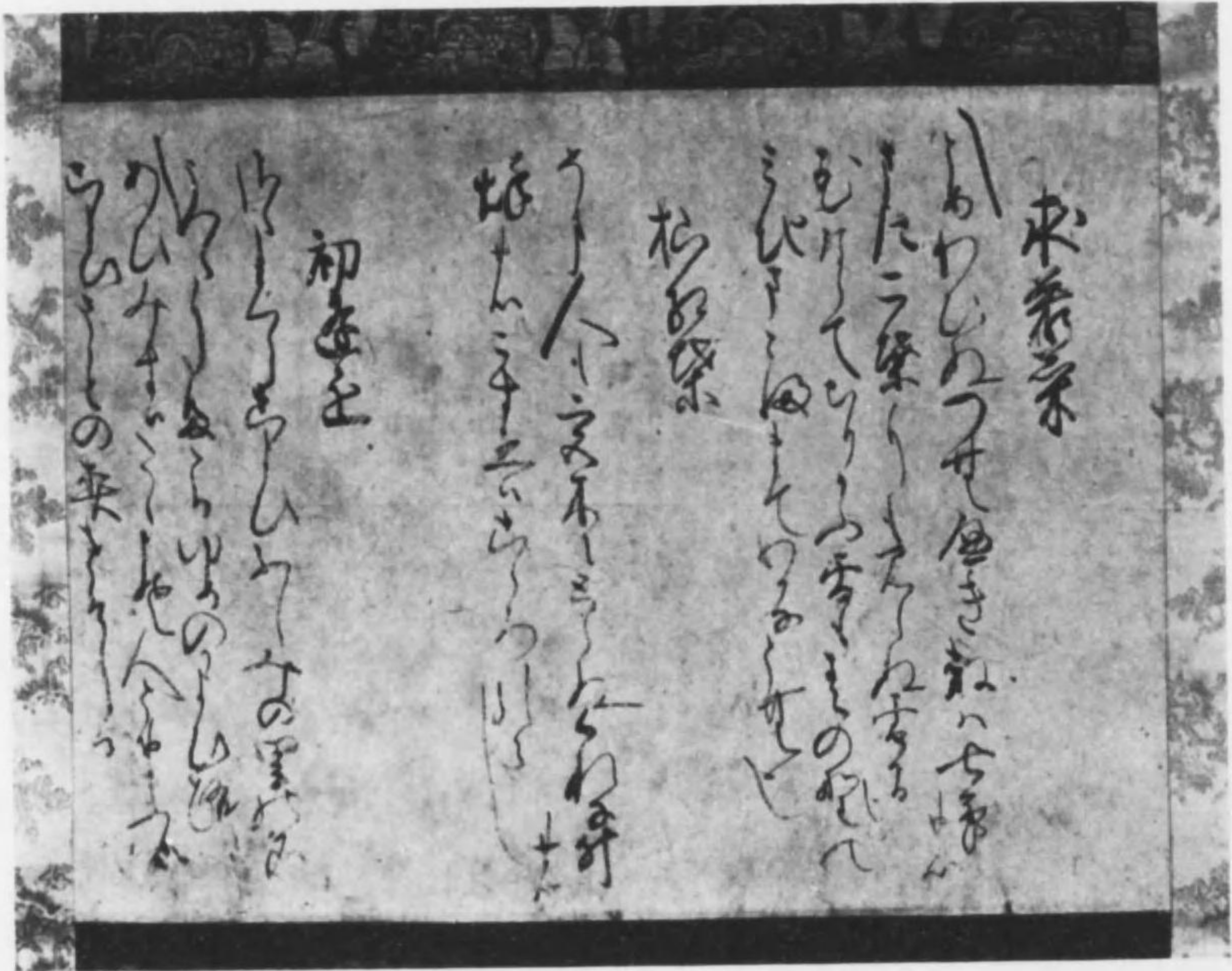
なつかしは夏くれかたの夕  
かせにすゝしくなりぬせみ  
のはころも



三 伏見天皇宸翰御消息 一幅

富來院事實躬卿  
 内々如此申候師信卿  
 去夜參候之間委令問答  
 候キ委座主ニ御問答候て  
 念々令落居事候敷爲御  
 意得此狀も進候大夫  
 今朝定參事候敷事々  
 期面候謹言

五月八日 (御花押)



四 後土御門天皇宸翰御詠草 一幅

求若菜

とめわひぬつむへき数は七草の  
また二葉にも見えぬ雪間を  
花ならてちりかう雪も春の野の  
みちまとうまてわかなきむ也

袖紅葉

そま人も宮木にとらぬくれなるの  
秋のこそ糸はこゝろ引らし

初逢戀

さゝまくらこよひふしみの里の名も  
うつゝにたゝるゆめのかよひ路  
あひみすはたゝよそ人とおもふ（詞也）  
こよひまことの契をそしる



五 後柏原天皇宸翰御詠草 一幅

永正十二年二月廿二日水無瀬御法樂

點前内府

梅薫風

たかさとしらぬにかせのさそひきて  
 心うかるゝ梅かゝそする  
 うつしては袖にもあまる梅かゝや  
 身にと隙しめて吹春の夕かせ

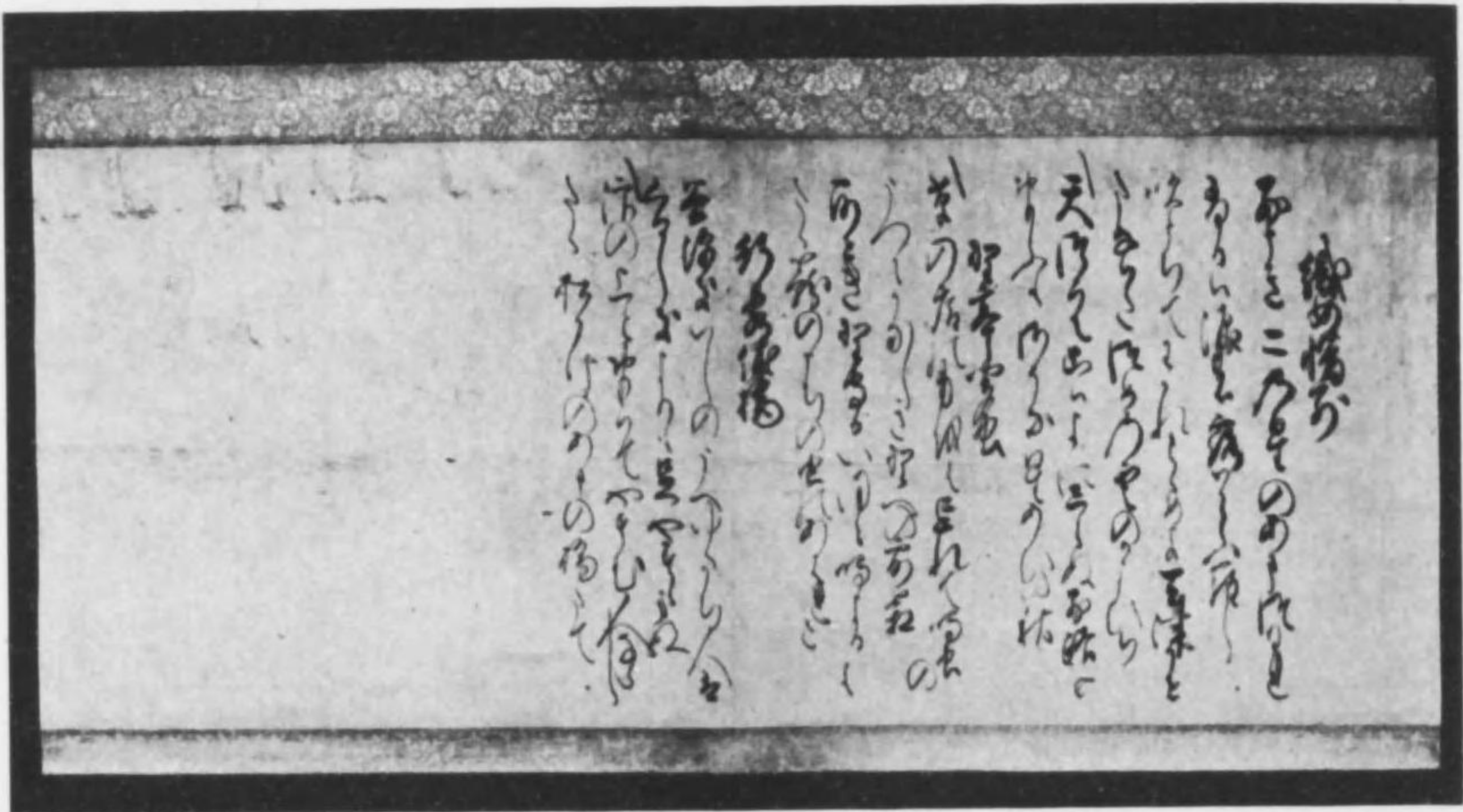
暮春鐘

なかすみさへかめわひぬたゝけふのみの春タネとのそら  
 入あひのかねはなかめわひぬる隙かすみはてゝも  
 ゆく春をしたふこゝろも鐘の音も  
 このくれのみの空につきぬる

忍涙戀

我なからしらぬゆくゑをしるもうし  
 しのひはつへきなみたならしと  
 露けさは涙なからのしのふ草  
 しのふ心にしけりあふらん





六 後柏原天皇宸翰御詠草 一幅

織女惜別

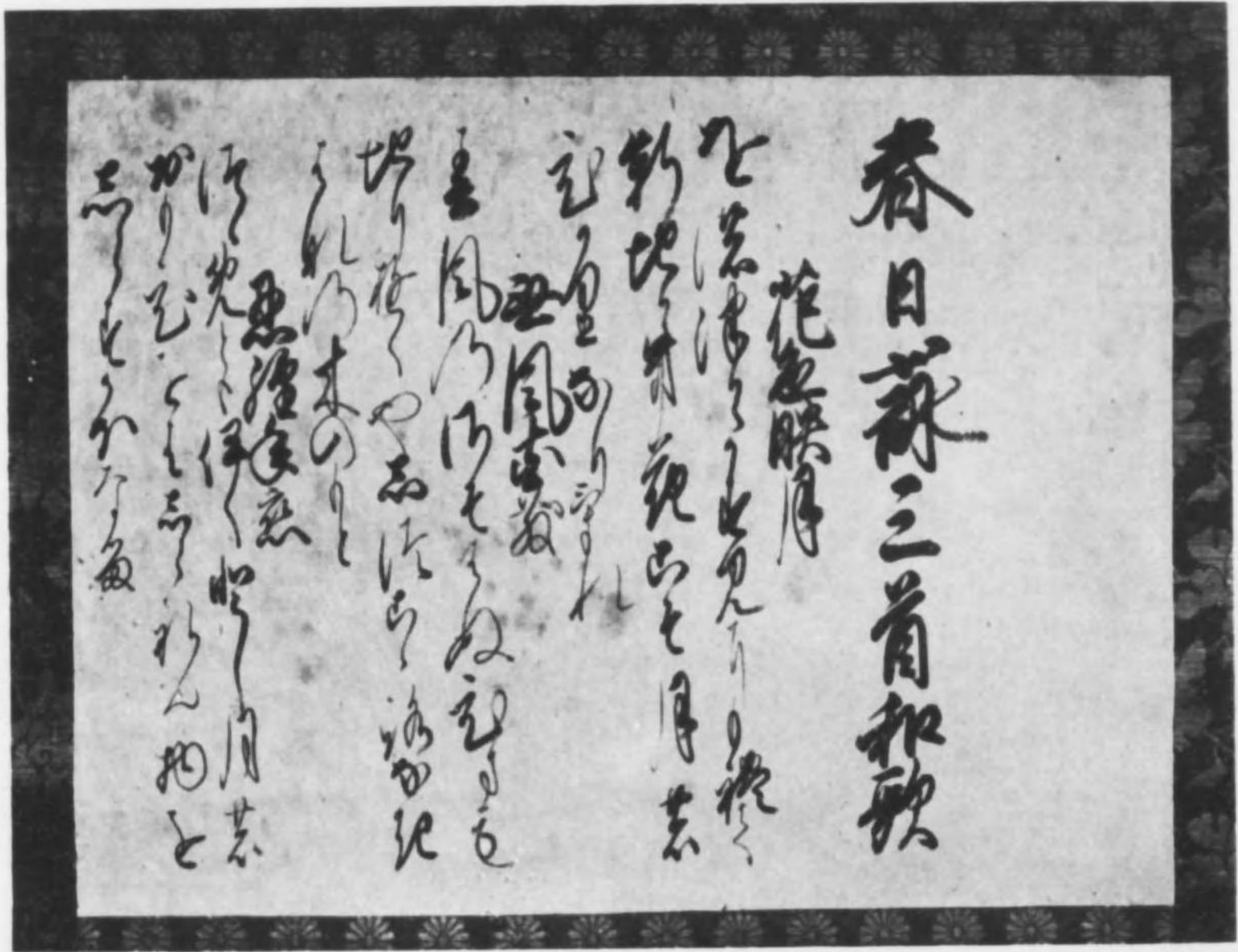
別うき二の星のあまつひれ  
 ふるは涙の露はらふらし  
 吹とちてわかれとめよ天津かせ  
 たなはたつめの雲のかよひち  
 天津空こはよにしらぬ別路を  
 おもふもさうな星あひの秋

野亭聞虫

草の庵の身をは忘れて鳴虫の  
 うつゝかなしき野への露霜  
 所せき野守かいほに鳴よるも  
 たゝ籠のうちの虫のあはれさ

行客休橋

谷深きいしのうへゆくかち人は  
 くるしきよりも足やすまぬ  
 浪の上とおもはてやすむ人ならし  
 たゝ松かけのあまの橋たて



七 後奈良天皇宸翰御懷紙 一幅

春日詠三首和歌

花色映月

をのつからかすみにもれて  
 軒ちかき花こそ月の  
 ひかりなりけれ

無風花散

春風のさはぬひまも  
 ちりゆくやしつこゝろなき  
 はなの木のもと

忍経年戀

つゝめともいくとし月の  
 おもひをはしられん物を  
 しらすかほなる



八 正親町天皇宸翰御懷紙 一幅

詠竹不改色和哥

二品方仁親王

十なほなる代々の根  
さしやわか竹のちひ  
ろもまたぬ陰に見  
すらむ



九 後陽成天皇宸翰御懷紙 一幅

詠二首倭歌

五月雨

さみたれは岩間くも  
瀧おつるをとにそまかふ  
庭のいけみつ

寄神祝

ゆたかなる世や久堅の  
天照す神のめくみと  
猶あふくらむ



一〇 後水尾天皇宸翰御懷紙 一幅

詠池岸有松鶴

和歌

池水のきく根の  
 松に千世ふへきと  
 ころを見てやたつもす  
 むらむ



一一 後水尾天皇宸翰徒然草詞 一幅

萬にいみしくも色このま  
 さらんをとこはいとさうくしく玉の  
 さかつきの底なき心地そすへき  
 露霜にしほたれて所さため  
 すまとひありき親のいさめ  
 世のそしりをそむくに  
 こゝろのいとまなくあふさ  
 きるさに思ひみたれさるは  
 獨ねかちにまどろむ  
 夜なきこそをかしけれ  
 さりとてひたすら  
 たはれたるかたには  
 あらて女にたやす  
 からす思はれんこそ  
 あらまほしかるへき  
 わさなれ

隨求陀羅尼  
唵跋羅跋羅三跋  
羅三跋羅印陀哩  
野尾戌馱顛吽吽  
嚕嚕九黎娑婆訶



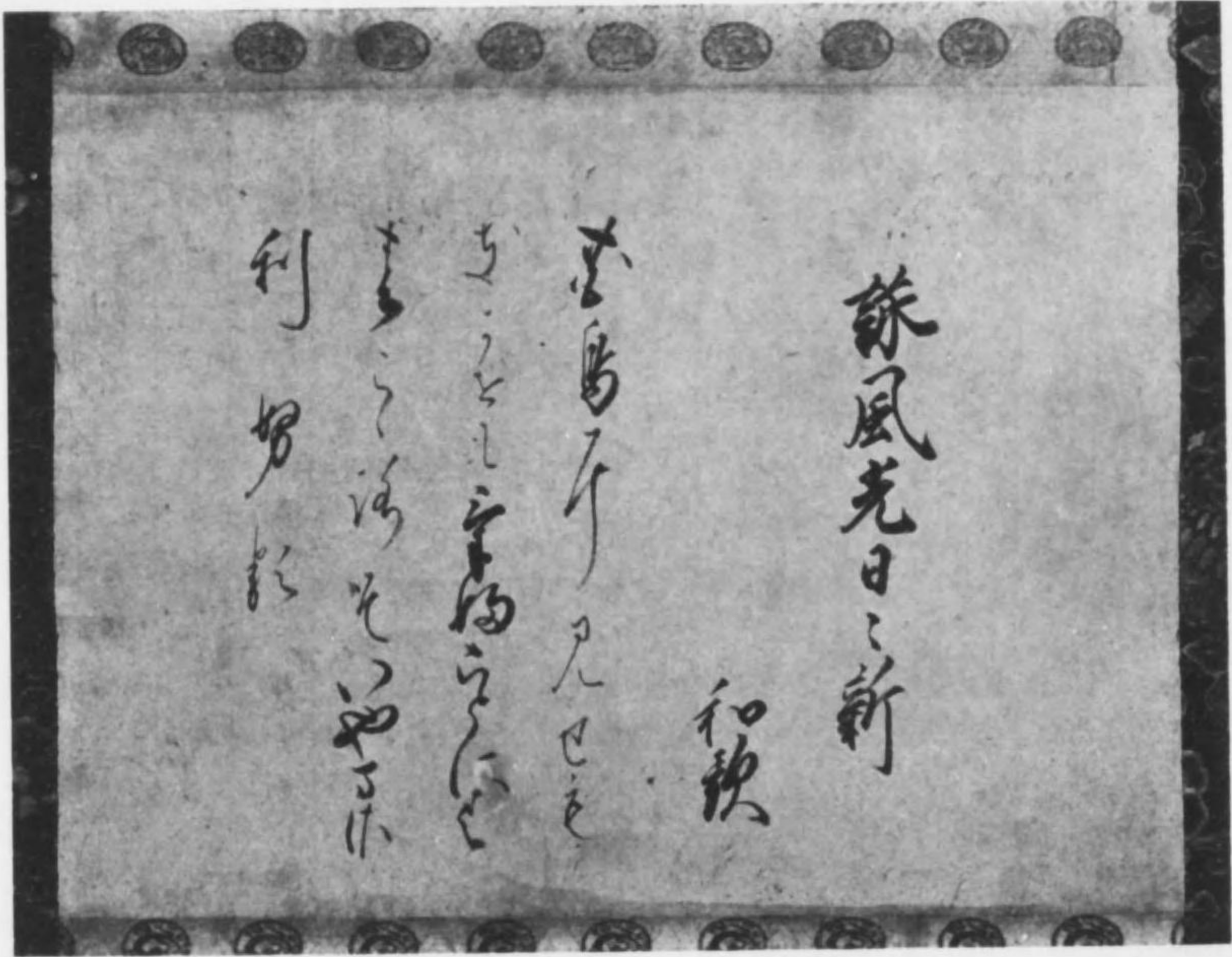
一三 後西天皇宸翰御懷紙 一幅

詠池岸有松鶴

倭綺

きしの松きみか  
とも鶴かすの千  
世のけしきをうつつ  
いけ水



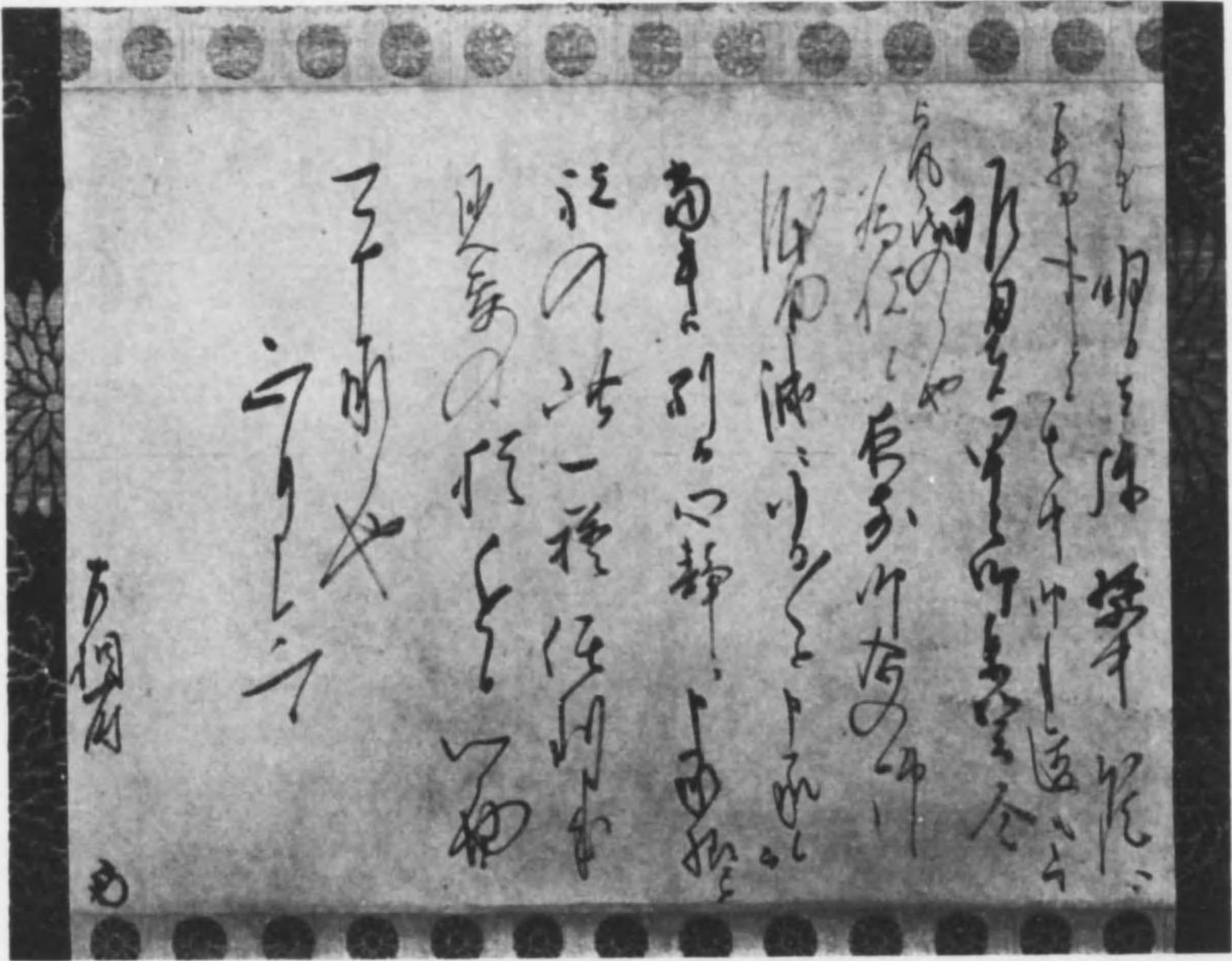


一四 後西天皇宸翰御懷紙 一幅

詠風光日々新

和歌

花鳥に見せも  
 きかせもけふことに春  
 のこゝろそいやまさ  
 りぬる

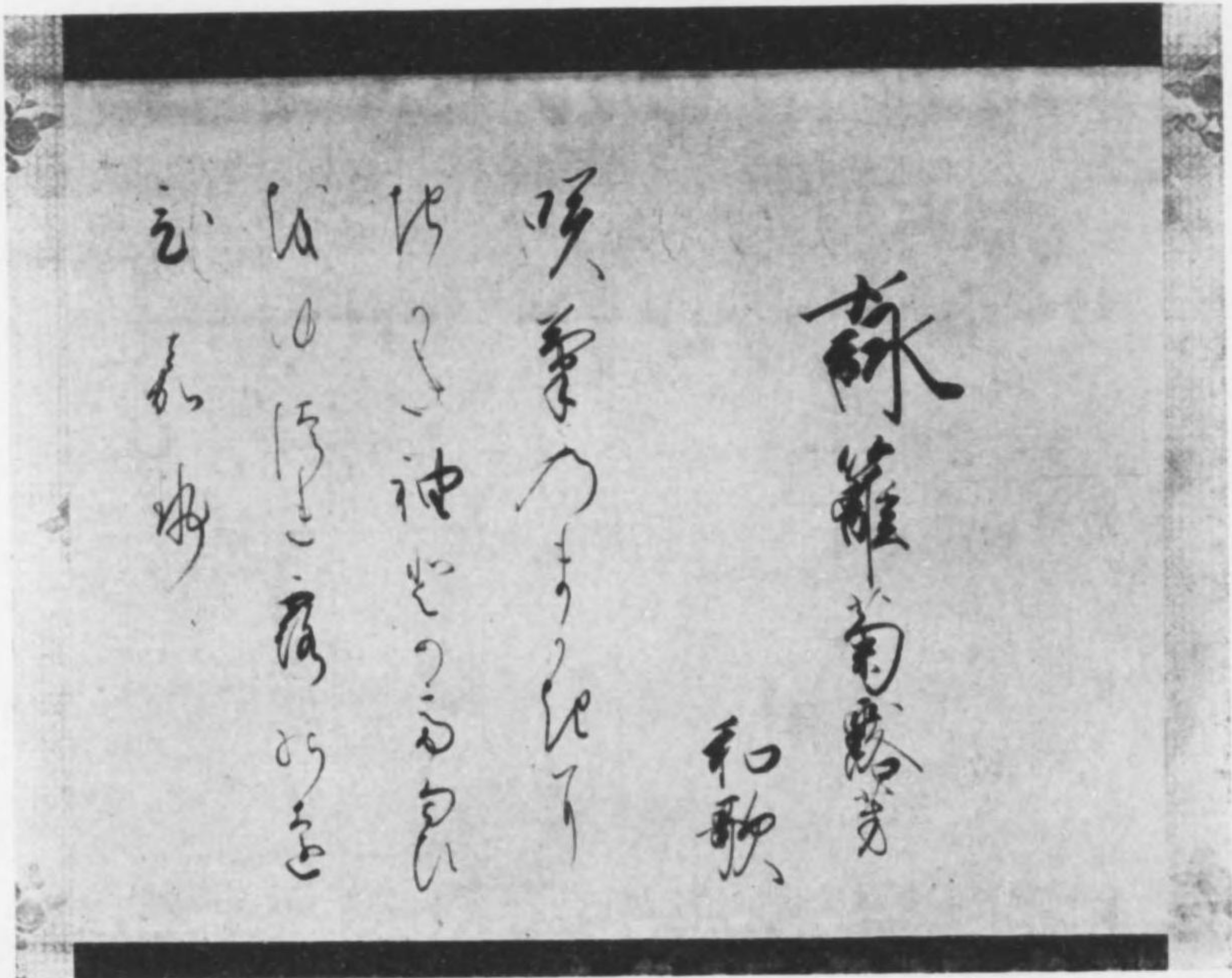


一五 後西天皇宸翰御消息 一幅

猶々明日者珍禁中本院へ  
 参申事ニ候其中御手透も候ハ、  
 奥風待入候也

昨日者早々御参賀令  
 爲悦候夜前御企の御  
 紙面誠ニゆる／＼と申承候而  
 當年ハ別而心静ニ申承候に  
 祝入候此一種任到來  
 見参入候猶近日以面  
 可申承候也

正月三日  
 左相府 (御花押)

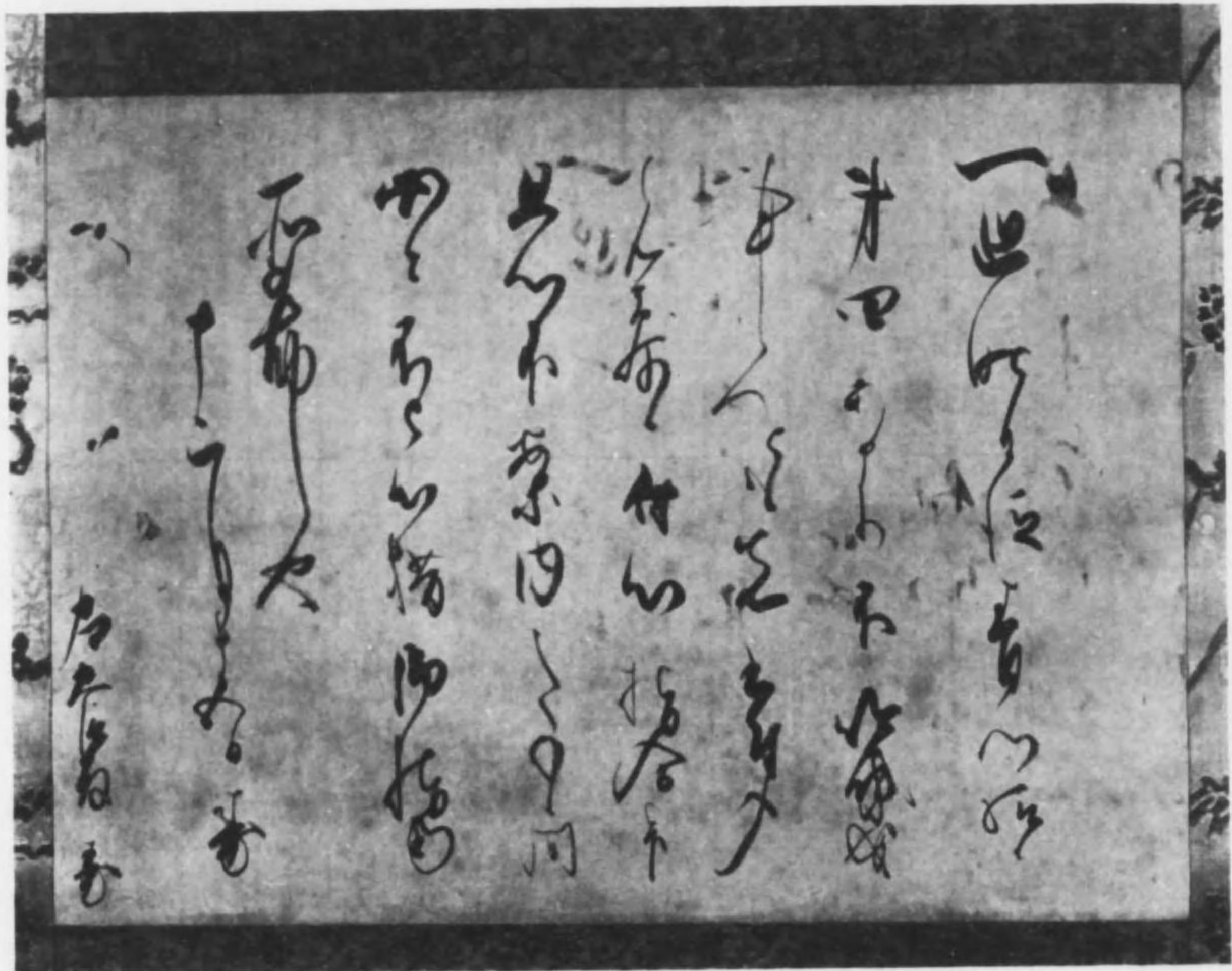


一六 靈元天皇宸翰御懷紙 一幅

詠籬菊露芳

和歌

咲菊のまかきに  
ちかき袖とめて匂ひ  
をゆつれ露のを  
ひかせ

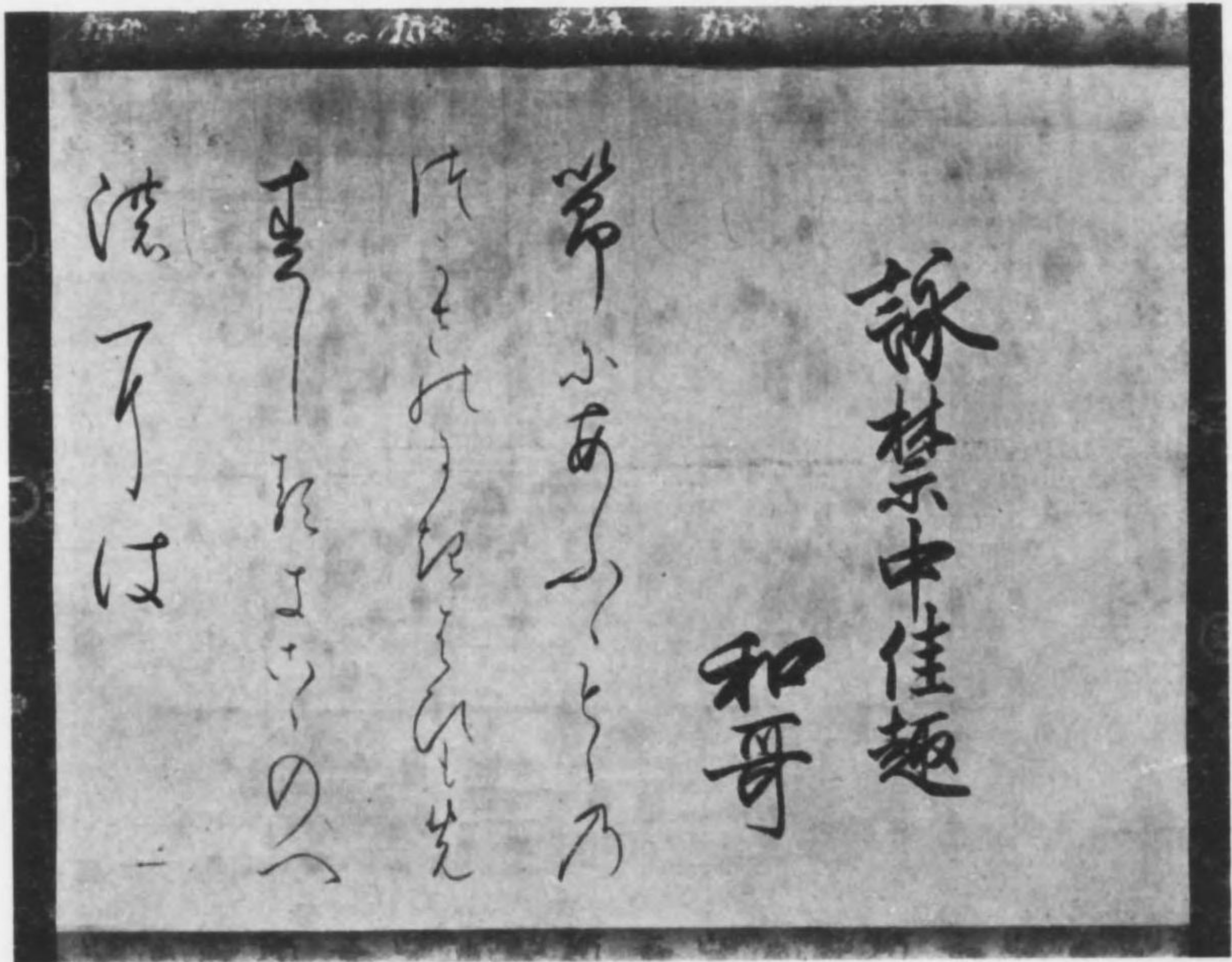


一七 靈元天皇宸翰御消息 一 幅

一 巡昨日從青門給候  
 第四あまり不吟味成  
 事候へとも先書付入  
 てん忝候付心指合被下  
 且以案内之事候間  
 必々不被心措御指南  
 所希候也

十二月十五日 (御花押)

(御切封) 左大臣殿 (御花押)

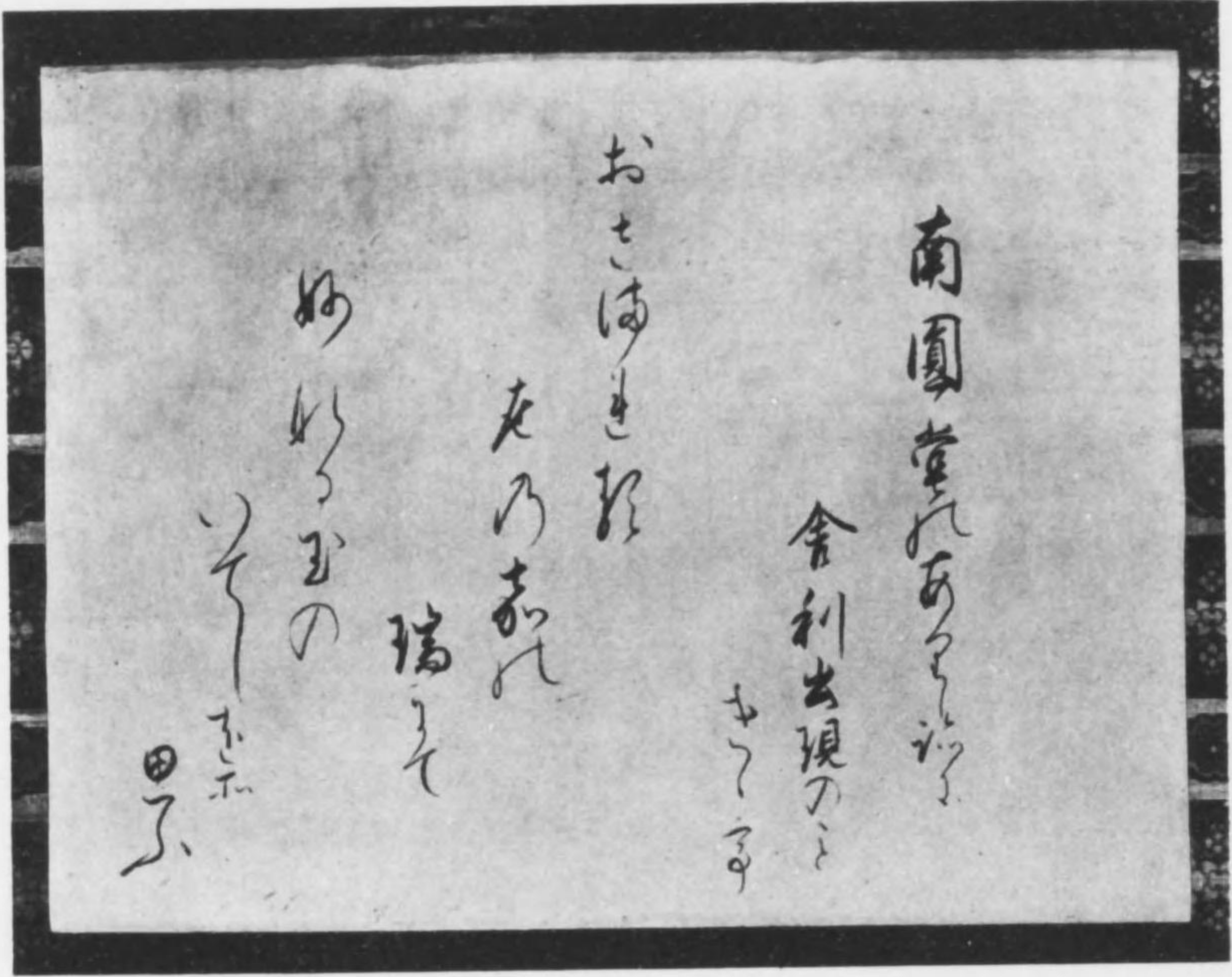


一八 中御門天皇宸翰御懷紙 一幅  
(享保十九年二月廿八日和歌御會始)

詠禁中佳趣

和哥

節にあふもゝの  
 つかさのきはひも先  
 春しるきこゝのへ  
 のには



一九 中御門天皇宸翰御懷紙 一幅

南圓堂のありし跡に

舍利出現のこと

きよて

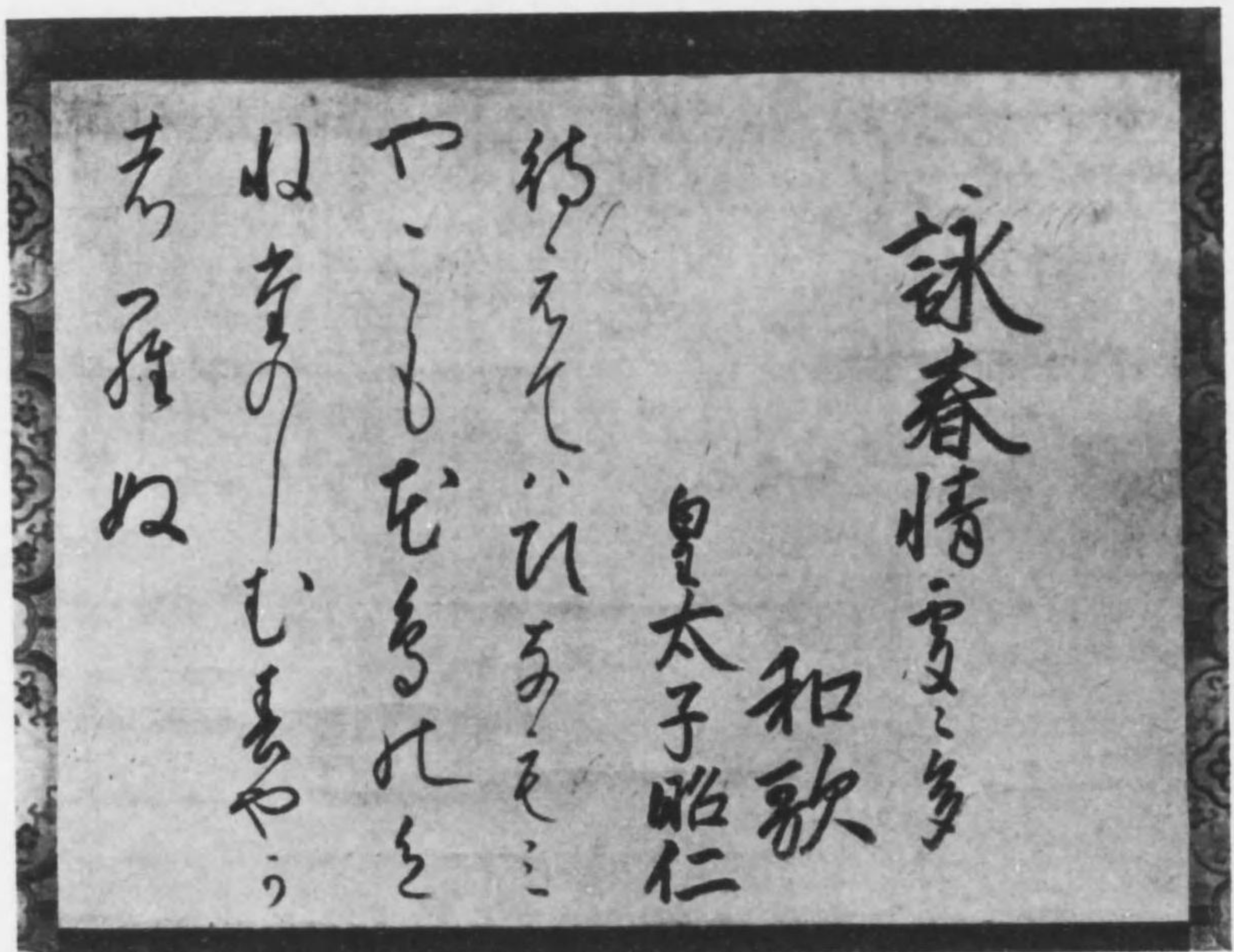
おさまれる

世の嘉の瑞にて

妙なる玉の

いてしをそ思ふ

ふ



二〇 櫻町天皇宸翰御懷紙 一幅

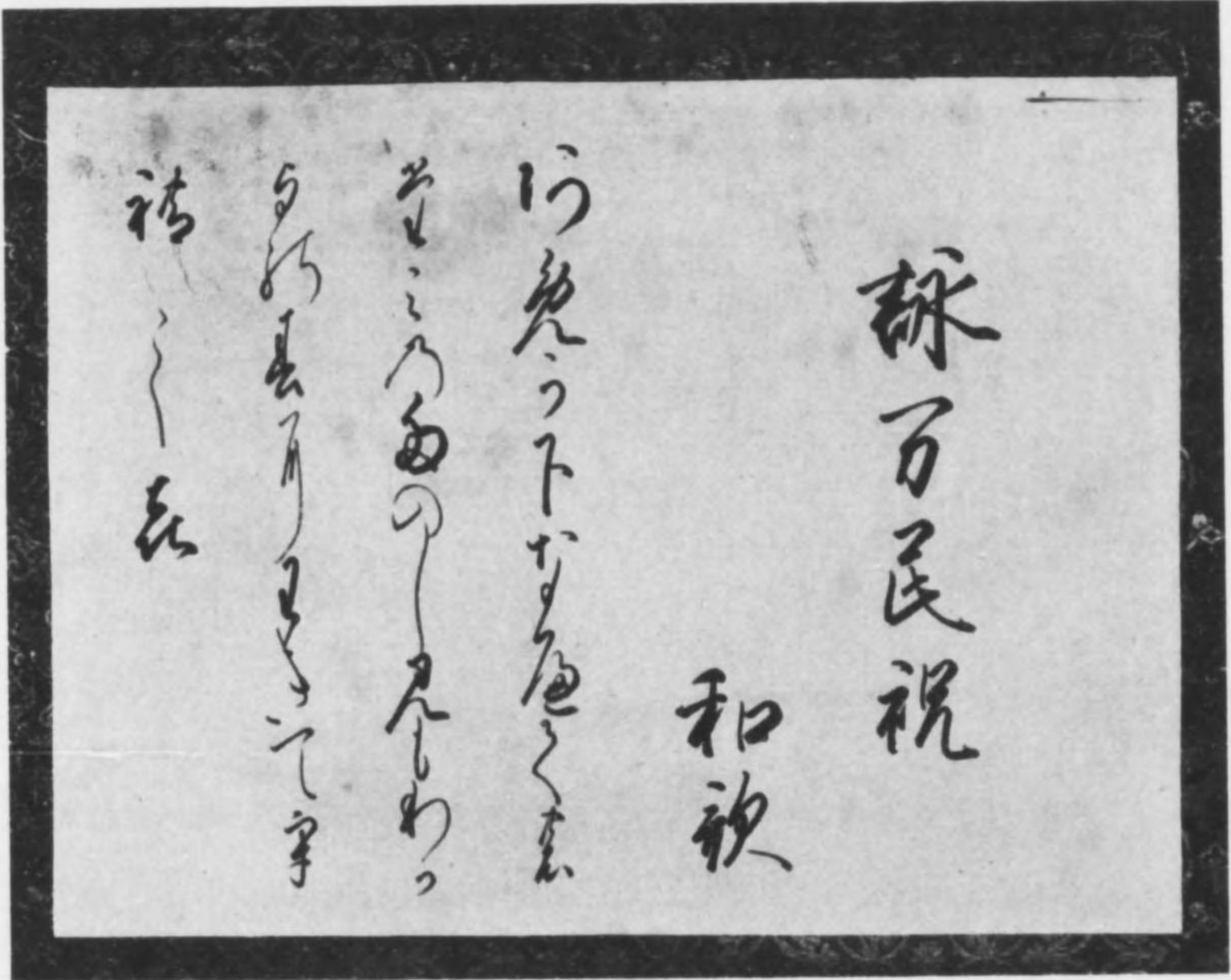
蓋裏押紙墨書「享保六年公宴御會始、御出座第二度、千時御年十二」

詠 春情處々多

和歌

皇太子昭仁

待えてハひなもみ  
やこも花鳥の色  
ねたのしむ春やか  
はらぬ



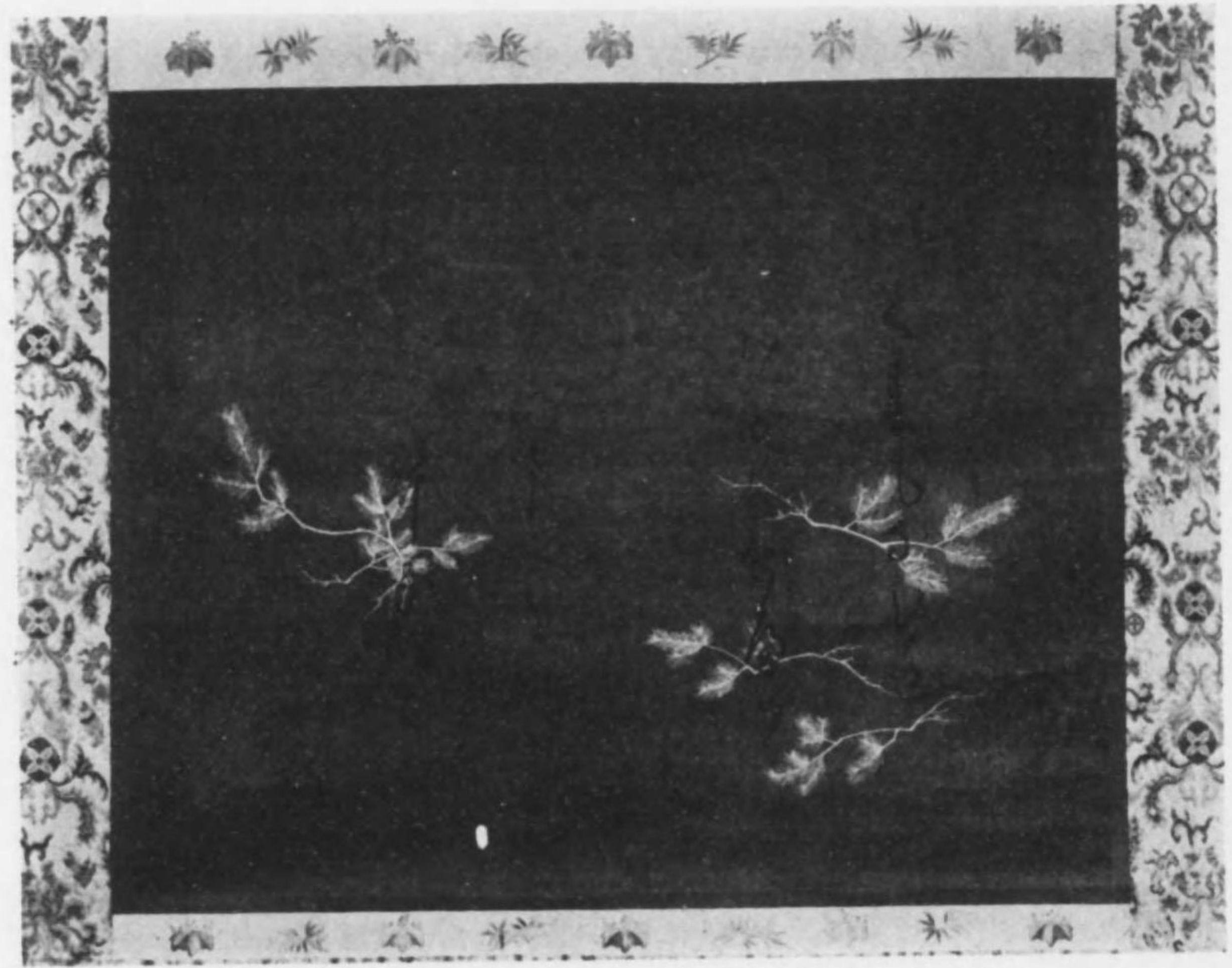
二二 桃園天皇宸翰御懷紙 一幅

詠万民祝

和歌

あめか下なへての  
たみのたのしみもわか  
よの春にわきてう  
れしき



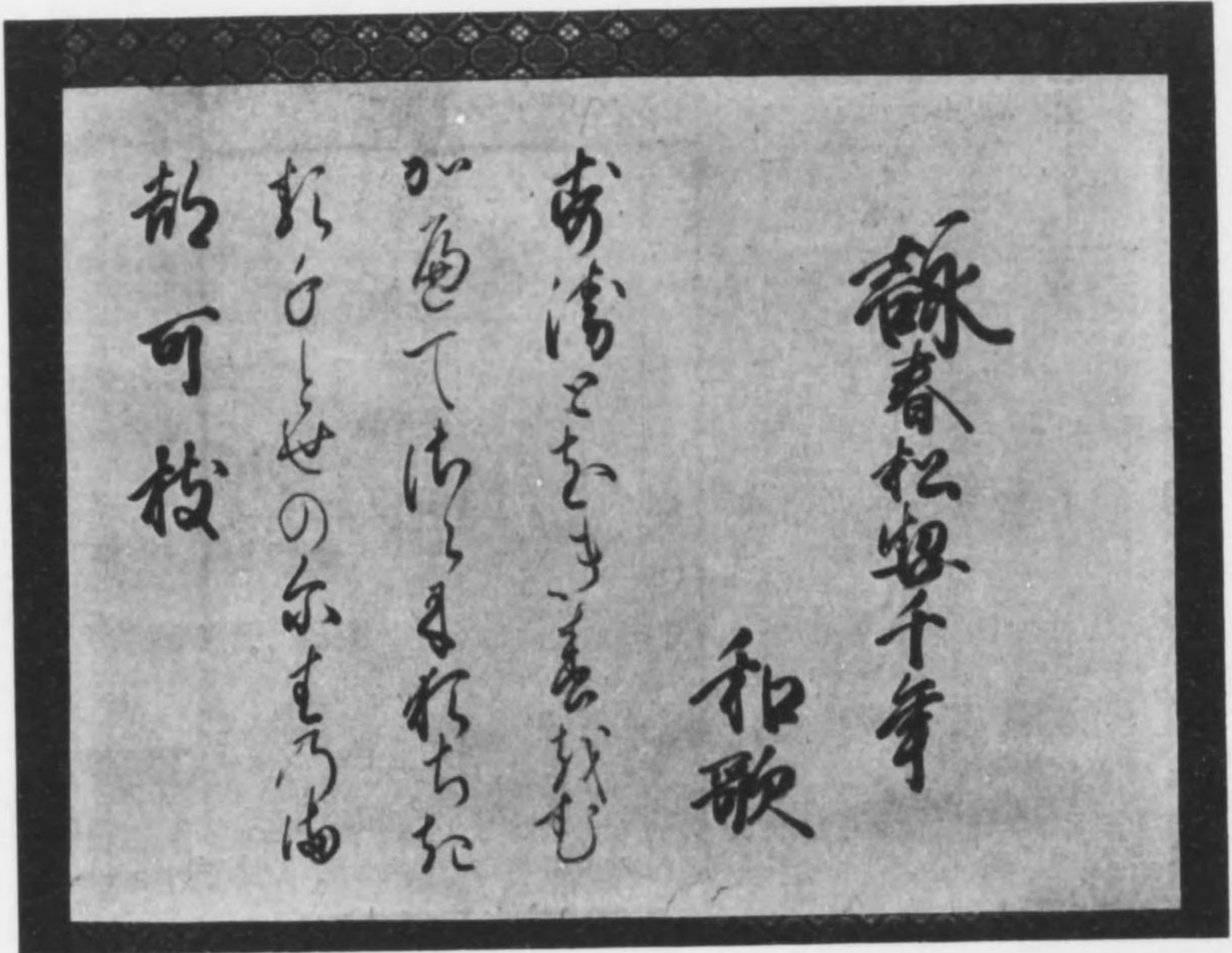


二三 後櫻町天皇宸翰御懷紙 一幅

(金泥繪紙墨書)

いく春もなを色  
 そへてすへらきの  
 よゝのさかへを  
 契る松か枝





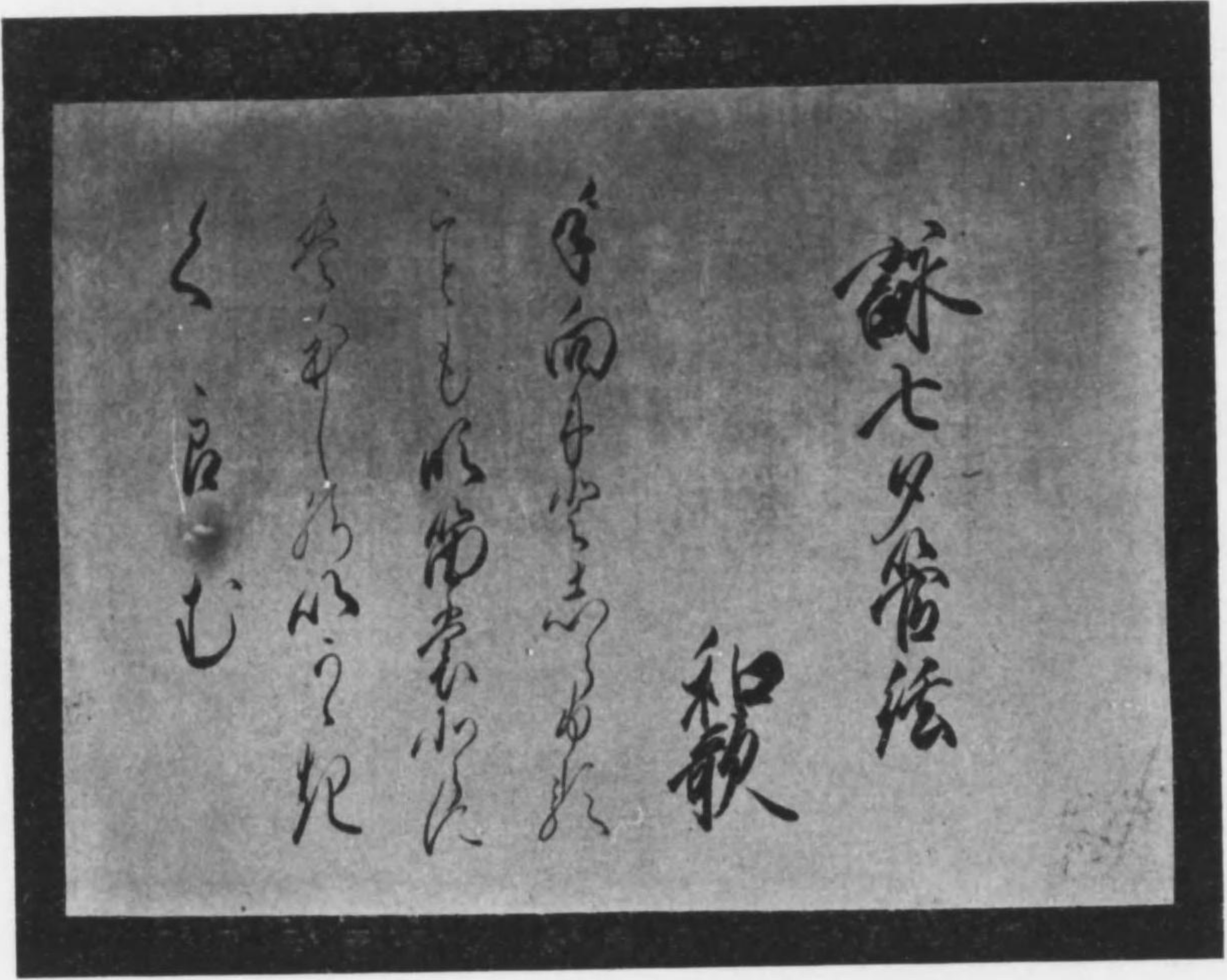
二三 後桃園天皇宸翰御懷紙 一幅

(明和八年正月和歌御會始)

詠春松契千年

和歌

東清とをき春をむ  
 かへてさらに猶ちき  
 る千とせのにはのま  
 つか枝



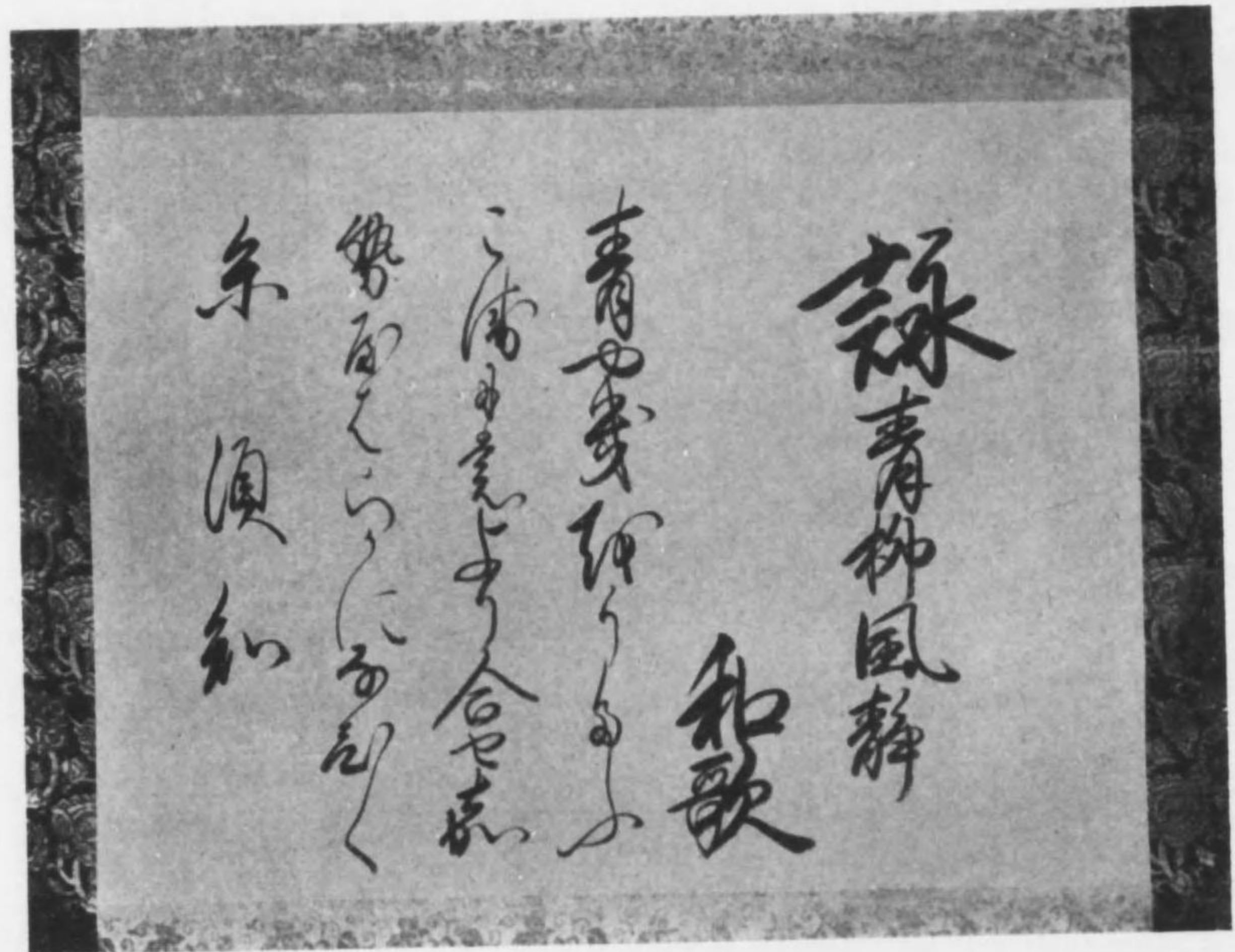
二四 仁孝天皇宸翰御懷紙 一幅

箱ニ弘化三年九月廿四日拜領ノ記アリ

詠 七夕管絃

和歌

手向にとしらふる  
 ことも吹笛もそらに  
 はほしのいかゞき  
 くらむ



二五 孝明天皇宸翰御懷紙

一幅

詠 青柳風靜

和歌

青やきをうたふ  
 こゑにもより合せか  
 せやはらかにひく  
 糸すち



307

91

陽明文庫圖錄 第一輯

昭和十五年十一月五日印刷  
昭和十五年十一月十日發行

頒價金貳圓

東京市麹町區三ノ四靈山會館

陽明文庫

編輯兼 水谷川忠磨

發行者 東京市品川區大崎本町三ノ五八

印刷者 田中松太郎

東京市品川區大崎本町三ノ五八

印刷所 半七寫真製版印刷所

東京市麹町區霞ヶ關三ノ四霞山會館

發行所 財團法人陽明文庫

終

